

新連載

柔道・友情・平和

第1回

山下 泰裕

勝ち負けの結果を超えて通う心

.....
ロス五輪で金メダルを競った
M・ラシユワンの誇り

心に浮かぶあれこれを書き記す

あれから23年たつ。あのロサンゼルス五輪での試合は過去の記録となってしまったが、私にとっては子どもの頃からの夢が実現し、さらに軸足の怪我を乗り越えての金メダル獲得であっただけに、今も強烈に胸に焼き付いている。生涯忘れられることはないだろう。

タイトルの「柔道・友情・平和」は、財団法人日本武道館会長であった松前重義先生が国際柔道連盟会長在任中（1979～1987）に柔道の世界的普及を願って示されたもので、講道館柔道創始者・嘉納治五郎師範が掲げられた『自我共栄』の精神に通じるといえます。私は、現在、柔道をもっと世界に広めたい、柔道の心をさらに広めたいと考え、微力を尽くしています。試行錯誤の毎日ですが、私の目標は、この言葉が示す理念を継承し具現化することです。その意味から2006年4月に設立した特定非営利活動法人「柔道教育ソリダリティ」のモットーに掲げました。

この言葉は、私の目標と役割を示しています。私の気持ちを表しているので、今回の連載のタイトルにしました。ご理解いただければ幸いです。

振り返れば、決勝のラシユワン選手をはじめとして良き相手と戦うことができ、また日本選手団の先生や仲間など多くの方々を支えられ、期待に応える結果を残せて本当に幸いだった。それに帰国後、国民栄誉賞受賞の栄に浴した。それまでの競技成績や柔道に対する





ロサンゼルスオリンピック表彰式で握手を交わすラシュワン選手と筆者 (写真提供・ベースボールマガジン社)

姿勢などが評価されたようだが、やはり五輪での金メダルが要因になったのではないかと思う。

翌年の全日本柔道選手権大会を最後に、選手生活に終止符を打った。今では、ここままで自分の人生における第一のステージであったと捉えている。第二は、大学柔道部や全日本男子チームの監督を務めた時期、第三は、全日本柔道連盟や国際柔道連盟(IJF)の役員として柔道の普及振興に微力を尽くしている現在である。

まだまだ人生を振り返る年齢ではないし、その余裕もない。しかしながら思うところあって、今回、月刊『武道』編集部のご好意に甘え、これまでの柔道人生や現在の活動に触れながら心に浮かぶあれこれを、主に「人」との関わりから書き記すことにした。話の口火は、やはりあのロス五輪決勝の相手、エジプトのモハメド・ラシュワンだ。

ロス五輪でのアクシデント

1984年(昭和59年) 8月11日

日(日本時間12日)の記憶を呼び覚ますと、大体次のようになる。この日、柔道競技はカリフォルニア州立大学ロサンゼルス分校体育館で私が出場する無差別級が行われた。出場者は15名、前日の95kg超級で斉藤仁が優勝して日本の金メダルは3個、目標は5個であっただけに敗北は許されない状況だった。しかし、国のためという気負いはなく、数日前に襲われたプレッシャーも不思議となくなっていた。私は、この日のために新調した柔道衣を着て試合場に入った。

1回戦、セネガルのコーリー戦はわずか27秒で、本勝ちしたが、次の2回戦でアクシデントが起った。西ドイツのシュナーベルに内股を掛けたとき、右軸足に異常を感じたのである。試合は相手の背負投を潰して送襟絞に降したが、ふくらはぎを裂傷した。私は、いつものように歩いたつもりだったが、右足を引きずる姿を見て場内にとよめきの声が上がった。

そして、負傷後の準決勝戦でフランスのデルコロンボの大外刈に



ロサンゼルスオリンピック以来、
生涯変わらない友情で結ばれている
ラシュワン選手と筆者

対して身体が反応できず、ポイントを先取された。それまで外国選手の手掛けた技で投げられたことがなかっただけにショックだった。一瞬弱気になったが直ぐに負けじ魂が頭をもたげ、横四方固の寝技で逆転勝ちした。そして、いよいよ決勝を迎えることになった。

聞くところによると、ラシュワンのコーチである山本信明先生は、「最初の1分が勝負の鍵。山下は自分から技を仕掛けられない。こちらから掛けたところを狙うから、攻撃したい気持ちを抑えよ」とアドバイスをされたそうである。一方、私は、師で日本チ

ム監督の佐藤宣践先生から、「投げられてもいいから寝技に持ち込め」と言われた。結果は、開始早々にラシュワンが掛けてきた右と左の払腰をかわして倒し、わずか横四方固に抑えて、本勝ちを収めた。

表彰式のことだった。表彰台上がろうとする私の身体をラシュワンが支えてくれた。下りるときも手を貸してくれた。このときの彼の好意と態度に深く感謝している。

私ではなく、彼が金メダリストであつても決しておかしくはなかった。私が勝てたのは本当に幸運

だった。その彼は、試合後、マスコミから次のような質問を受けていた。

「山下は右足を怪我していた。この怪我した足を意識的に攻めれば、あなたは勝てたはずだ。なぜそういう戦い方をしなかったのか。なぜ勝てるチャンスを活かさなかったのか」

また、試合前にエジプト柔道連盟の役員からは、「チャンスだから怪我した足を狙って、そこを攻撃しろ」と指示されたそうである。

ラシュワン選手の誇り

なぜ彼はそうしなかったのだろうか。その答えを彼自身の口から公に聞くことができた。2005年8月30日、エジプトで開催された第24回世界柔道選手権大会を前に開かれた講演会のことだった。

ここでラシュワンは、当時を振り返って次のように述べた。

「確かにそういう試合をすれば勝てたかもしれない。しかし私はアラブ人だ。私にはアラブ人の誇り

がある。だからそんなフェアでない戦いは絶対にしない」

そして、役員の指示には、「そんなゲームはできません」と断つたとのこと。彼の返答にマスコミの人々が感銘を受け、後にラシュワンはユネスコのフェアプレー賞を受賞した。私の怪我は私の責任であり、彼が怪我した右足を攻めても反則ではない。しかし、あえて勝利の確率が高い攻め方をしなかった。このことは、やはり人間の生き方を示していると思う。彼の清々しさ、人柄が表れている。

この日の思い出を彼は語った。

「私と山下さんは別のグループになっていました。試合が始まる前に、山下さんは私のところに来て握手をして、ぜひ頑張ってください、という一言をかけてくれました。その言葉は非常に励ましとなり、精一杯力を出し切って、山下さんと決勝で戦えるように頑張りました。山下さんとの試合は非常に光栄なことですし、当時は誰でも山下さんと決勝を戦いたいと思っていました。試合が終わって



世界中の子どもたちに囲まれる筆者。自分の柔道人生を振り返り、選手の時期が第一段階、指導者の時期が第二段階、そして柔道をもっと世界に広めたい、柔道の心をさらに広めたいと考え活動している現在を第三段階と捉えている。道場で培った柔道の心を広く社会で活かしたいと考え実行に移している。

ダルが決まってから山下さんと抱き合ったことは、いまだに記憶に鮮明です」

エジプトが世界柔道選手権大会に初参加したのは1979年のパリ大会ということだから、東西冷戦の影響でソ連(当時)などの東側諸国が不参加だったとはいえ短期間でオリンピック競技の決勝まで進出する選手が現れたことは驚きだ。ラシュワンの資質の高さがかがえる。

ところで、彼は東海大学でも練習を積んでおり、私も旧知の間柄であった。大学での練習についても触れた。

「期間はたった40日間だったので、私の人生を変えたといってもいいほど大きな意味がありました。そのときに初めて激しい練習を経験し、朝や夜の練習などで時間をきちんと守って行うということを学びました」

ロス五輪前にはその成長を佐藤先生に認められ、「今度のオリンピックで何かを獲得できるかもしれないね」と激励され、この言葉

に励まされたそうである。

勝負に人生を懸けた者同士の友情

私はロス五輪で自分の夢を実現したが、まさしく「勝負は時の運」、それは本当に幸運な金メダルだった。柔道選手にとって4年ごとに開催されるオリンピック競技会への道のりは決して簡単ではない。1976年のモントリオール大会にはわずかな差で補欠、1980年のモスクワ大会は代表になったものの日本が不参加、私にとってロサンゼルス大会が年齢的に最後の大会だった。

選手は試合にすべてを懸け、勝利を追求する。勝利に執着する中で、やがて執着心を捨てることで、勝利のために大事であることを学ぶ。この真髄は、理屈ではなく体験の中から自得するものだ。そして、その人柄は、技や試合態度に表れる。勝負に人生を懸けた者同士、勝ち負けの結果を超えて心が通う。誇り高きラシュワンとの試合と友情は、私の誇りでもある。